

前途多難な恋占い

目次

前途多難な恋占い

5

前途多難の恋模様

207

前途多難な恋占い

人一倍、運が悪いつてことは、
二十五年間生きてきて、もうとっくに気付いてた――

だからこの人に懸けてみようと思った。
きっとこの人が、私を救う救世主になってくれる……はず。

1

「ここが、マダム・オルテンシアの館……」

一方通行の細い道路を隔てた向こう側に立つのは、日本らしからぬ異国風の建物。

タマネギ型の丸い屋根にカラフルな色合いの壁。煌びやかな飾りの付いたカーテンが入口や窓を覆っている。

あまり大きくないその建物の周りにはランタンが置いてある。ランタンの中には本物の蠟燭が入っているようだ。ランタンの中には本物の蠟燭が

不規則な炎の揺らめきは壁に影を生み、ミステリアスな雰囲気を出している。なんだか異世界に迷い込んだようで、私は少しだけ進むのをためらった。

ごくりと唾を呑み込み、手に持つ雑誌に視線を落とす。

間違いないここに載っている建物と同じなのに、雑誌の写真は昼間のせいか印象がまったく違っていた。

「だ、大丈夫よ……」

私、早瀬香織は今までの不運な人生を捨てて、ここで生まれ変わるんだ――ううん、絶対に生ま

れ変わってやる！

決心の表れとしてぎゅっと手を握りしめると、雑誌がぐしゃっと潰れた。はっと気付いて皺を伸ばし、バッグの中にする。頼みの綱でもある雑誌を折るなんて、バチが当たったら大変だ。

「いざ、出陣！」

と、自らを奮い立たせて一歩踏み出した矢先、右側から猛スピードで車が近付いて来た。危険を察知して立ち止まったはいいけれど――

「きゃあっ」

その車はスピードを緩めることなく私に近付き、あろうことか地面にあった水たまりの水を、盛大に跳ね散らかして通り過ぎて行ったのだ。

「う、嘘でしょ……この前クリーニングに出したばかりなのに」

オフホワイトのコートに泥水の茶色い染みがじわじわと広がる。急いでハンカチで叩いたけれど、ここまでひどいと何の意味もないことくらいすぐにわかった。

「さいあく……」

そう、私はいつものこうなる。生まれてからずっと、記憶にある限りイイコトなんてなかった。

小学生の時、楽しみにしていた臨海学校は、直前に風邪を引いて欠席。

中学一年生の時、よりによって委員決めの日に親戚の葬式で休んでしまい、面倒なクラス委員を押し付けられた。一度経験があるってだけで、学年が変わっても誰かしらに推薦されて、結局三年間クラス委員だった。

高校の体育祭では、接戦の未追い抜いたリレーで大盛り上がりの最中、私の出番で思い切り転んでしまい、結局逆転負け。しかもそれが原因で総合優勝を逃した。

私は転倒した時、手首にヒビが入り全治三ヶ月。それなのに心配されるどころか、しばらく学校内で後ろ指さされてたっけ。

大学の時は――講義中も就活中も、思い出したくもない出来事で満載の四年間。

私はいつもいつも、ここぞという時に、いや普段の生活の中でも、大なり小なりこうした不運に見舞われ続けてきたのだ。

館の前に並ぶ数十人の人たちが私を見て、コソコソと何かを言い合っている。

きっと泥だらけのコートに気が付いたのだろう。私は同情入りまじる囁き声を聞こえないふりして、道路を渡って列の最後尾に並んだ。

二月の寒い中、コートを脱ぐわけにもいかず、私はバッグで泥汚れを隠すだけに止めた。

何もなかったように、携帯電話を操作しながら平静を装う。本当は踵を返して走って逃げたかったけれど、せっかくなので来たのに今さら引き返すわけにはいかない。

本当に、私って運が悪い。

そう考えるのは、今日だけで何回目だろう……

マダム・オルテンシア――年齢、性別共に不詳、ついでに国籍も不明というプロフィールを持つ、最近話題の占い師。

マダムというくらいだから女性だろうというのは察しがつくし、雑誌のインタビュー記事も日本語で答えているのだから当然、日本人だと思う。

なんでも占い好きの間では当たると評判の人物らしい。

言われた通りに行動すれば、何でも望みが叶う——そう聞いたのはついこの間、電撃結婚をした友人からだ。マダム・オルテンシアの言う通り海外旅行に行つて、彼女曰く「人生の伴侶」と運命的な出会いをしたそうだ。

正直、占いを信じていると言えば、嘘になる。

ファッション雑誌に載っている星占いも、毎朝テレビで流れる今日の運勢もその場で一喜一憂するだけで、数分もすれば忘れてしまうくらい存在。だって、占いの通りにするだけでうまくいくのなら、私のこれまでの不運はとくに幸運になつてはいるはずだから。

でも、まったく男つ気のなかつた友人が玉の輿結婚したとなると話は別。もしかしたら本当に願いが叶うのではと思つてしまう。

私だつて幸せになりたい。だからマダム・オルテンシアに占つてもらふことに決めたのだ。

長い行列の先頭と腕時計を交互に睨みながら数時間並び、やっと私の順番が来た。

期待半分、怖さ半分で厚手のカーテンをめくり中に入る。

途端、強いお香の香りに包まれた。頭の上ではオレンジ色の光を放つシャンデリアが煌めき、壁には外にあるランタンと同じようなものが並べられている。様々な色をした蠟燭に炎が灯つていて、それだけでも温かかった。

「いらつしやい、迷える子羊ちゃん……」

雰囲気は圧倒されて周囲を見回していた私に、奥の暗がりから声がかかる。

「あ、あのおつ」

「ウフ、初めての方ね？ マダム・オルテンシアの館へようこそ。アナタも人生に迷つてアタシのもとに辿り着いた憐れな子羊ちゃんね。さあ、お座りなさい」

ハスキーボイスに促されるまま、私は綺麗なネイルの施された指先がさし示す丸椅子に腰かけた。眼前で優雅に腰かけるマダム・オルテンシアは、千夜一夜物語に登場するような豪華な飾りの付いた衣服を身にまとつていた。頭部から口元にかけては薄布のスカーフで隠れているけれど、妖艶に微笑む口元が透けて見えて、ドキドキしてしまう。

マダム・オルテンシアは、私が一生努力してもなれないような超絶美人だった。

「アラビアンナイトのお姫様みたい……」

二の腕や胸元など肌の露出が多い衣装に見惚れ、思わず零れた言葉に、マダム・オルテンシアは一瞬、目を見開いたあと、スカーフの下でにつこりと微笑んだ。

「さあて、今日はどうしたのかしら？」

「あ、あの、えっと、私……」

この人なら、なんとかしてくれるかもしれない……ごくりと唾を呑み込み、私は家族にさえ話したくない悩みを打ち明けた。

「——それで、今まで本当に良いことがなくて、何かすると、いえ何もしなくても悪いことが起き

て、もう運に見放されてるっていうか……」

今までのことを思い出しているうちに、だんだん自分が情けなく思えてくる。がっくりと肩を落としながら話し終えると、マダム・オルテンシアが私の頭をぼんぼんと撫でた。

「大変だったのねえ……」

彼女が動くたびに飾りがシヤラシヤラと乾いた音を立てた。

「確かに、アナタ幸薄さいちゆうすくそうな顔してるわ。運に見放されるなんて、一体どうしちゃったのかしら」

「はい……自分でもそう思います」

「うーん……そうねえ……」

眩つぶやき、マダム・オルテンシアは丸いテーブルの上に置いてある石版を見つめる。大きな星の形と、文字だか記号だかの模様が彫られた真つ黒な石版だ。そしてその上に小さな石を転がし始めた。

きつと占いが始まったのだらうと思いい、私は黙って見つめた。

数分間それを繰り返したマダム・オルテンシアは、手を止めて顔を上げる。

「やつと見えたわ、アナタの運命を百八十度変えてくれる人物の姿が……」

「運命を……変える？ ほ、本当ですか!？」

私は興奮を隠し切れずに身を乗り出した。

「いい？ よく聞いてちょうだい……」

期待と不安で胸を押さえ、マダム・オルテンシアの目をじっと見つめる。

彼女は私を見ているようでいて、もつと遠くの何かを見つめているようでもあった。

「心の内側に燃えたぎる炎をまとっている……それは目に見えないけれど、アナタなら触れることができるわ。アナタの運勢を向上させるほどの力がある。かなりの強運の持ち主ぬしだわ……強運って言っても、それは誰に対しても発揮されるものではないのよ？ アナタと、この人が出会って初めて強くなるミラクルなパワーなの。この人と出会うことができれば、子羊ちゃんの運命は百八十度変わるでしょう」

「炎？ ミラクル……ですか?」

ちよつと、いやかなり抽象ちやうしょう的で意味がわからない。

「例えばどんな感じの人でしょうか？ 特徴とかありますか?」

「あら、難しすぎたかしら？ そうねえ、わかりやすく言う……夏生まれ、獅子座ししのA型。生年月日に数字の二が付くわ。一九八二年生まれとか、十二日、二十日が誕生日ね……あと、右手の甲にホクロがあるみたい」

「なるほど……その人とお友達になれば……」

私はバッグから手帳を取り出すと、聞いた条件をメモした。

生年月日に二の付く夏生まれでA型、右手にホクロ。これだけ条件がわかっていれば、見つけるのも簡単かもしれない。

「あら、お友達じゃだめよ。恋人にしなきゃ」

「えっ」

当たり前でしょう、というような顔をしたマダム・オルテンシアをまじまじと見つめる。

「こ、恋人お!?」

「まったく、アナタ、マダム・オルテンシアの恋占いの館やかたに何しに来たの?」

彼女は面白いものでも見たかのように、形のいい唇の両端をくいつと上げた。

テーブルに肘ひじをつけて身を乗り出し、秘密の相談をするかのように私に顔を近付ける。

「アタシが占った相手は子羊ちゃんこやぎちゃんの運命の男性よ?」

「う、運命の——男性っ!? そ、そんな……いきなり、なに言っつて——ど、どうしようっ」

私には、今まで彼氏というものがいたことがない。それなのに、初めての彼氏が運命の男性だなんて!

「だ、だめですっ! 初恋は実らないっつ言うし、それに男の人と二人きりで何を話していいかわからないし、そもそも私、男の人とお付き合いしたことがないんです! ——あ、一回だけ高校生の時に隣のクラスの男の子に告白されて付き合っただけがあっただけ、それは二日しか続かなくて、しかも手さえ繋つながなかったからノーカウントだろうし」

それを数に含めたとしても、私には恋愛経験がなさすぎる。

いきなり運命の男性を恋人にして、もしも嫌われてしまったら? 運命の男性を逃した私は、一生一人で不運な人生を歩んでいくっつてこと?

「そ、それは困る! けど、どうしよう!」

「まあまあ、落ち着きなさい子羊ちゃん。そんな後ろ向きじゃダメよ。そういう考えじゃあ今までの不運を一掃できないわ。アナタ、アタシのもとに何しに来たの? 運命を変えに来たのではな

て?」

……そうだ、私は変わるために来たんだ。

「わかりました。私、運命の人を見つけて……こ、恋人にして絶対に幸せになります!」

「ウフフ、いい子ね。そんな子羊ちゃんにイイモノを紹介するわ」

マダム・オルテンシアがごそごそと取り出したのは手の平に収まるくらいの水晶玉だった。

覗のぞき込むと、目を丸くした自分が映る。

「これ、幸運を招きよせる水晶玉なの。アナタになら……そうね、十萬円で譲ってあげるわ」

「じゅ、十萬……」

想像以上の高額に驚いた。でも……

急いで財布の中身を確認する。占いの予算がわからず、ここに来る前に銀行へ寄っつて来たことを思い出したのだ。

「ううっ、でも五萬しかない」

「あら、しょうがないわね。大サービス! 五萬でいいわよ」

「いいんですかっ!? じゃあ、それ下さいっ!」

「ウフフ、そうこなくっちゃ! 毎度ありー」

私にそっと水晶玉を手渡してくれたマダム・オルテンシアの瞳が、今までと違う輝きを放った——気がした。

二月も終わりに近付きつつある日の夕方。もうそろそろ春が待ち遠しくなる寒さの中、私はひとり、倉庫で商品を段ボールに詰めていた。

社内の商品在庫がすべて置いてある倉庫は広く、天井も高い。もうすぐ終業時刻だけあって、人気もなく寒々しい倉庫内は、微かな物音でも遠くまで響いた。足元に置いたミニヒーターがほんの少しだけ私を温めてくれている。

「九十九百……と。ボールペン一ダースが百箱」

もう一度、納品書と数を確認して商品を段ボールに詰め、梱包テープで封をする。

「よし、これで今日の発注分は完了！」

私が勤めているのは、文房具の企画・開発をしている会社。その中の、商品在庫を管理して取引先に引き渡す部署——商品管理部に所属して今年で三年目だ。

普段はパソコンへのデータ入力や納品書の作成などデスクワークをしているが、部の中では未だに下っ端で先輩がいないため、こんな雑用でも私の仕事になる。

「早瀬さん、それで最後？」

倉庫の扉が開き、台車を引いた香川さんが現れた。離れの倉庫と本社を何度か行き来しているせ

いか、動きやすいようにワイシャツを肘の部分まで折り曲げていた。

「あ、香川さん。そうです、お願いします」

段ボールに宅配便の伝票を貼り、同じ商品管理部の先輩、香川さんに引き渡す。その時ふと、視界に入った香川さんの右手の甲にホクロがあったのだ。

「あああっ！」

その手を取り、まじまじと見つめる。

これはっ！

「あの、香川さんって夏生まれですか？もしかして、獅子座のA型？」

「いや、違うけど……」

顔を引きつらせ、香川さんは私の両手から自分の手をさっと引き抜いた。そして、そのまま段ボールを台車に積んで逃げるように去って行ってしまったのだ。

「香川さんでもないのか……」

ぼつりと呟くと、背後からくすくすと笑い声が聞こえる。香川さんと入れ違いで来た青木さんだった。

「早瀬ちゃん、前から気になってたけど、それ何？」

青木さんは、入社当時から私に仕事を教えてくれている先輩だ。こげ茶色のロングヘアはツヤツヤで、いつも余裕そうな笑顔で他部署の人と話していて、これぞ仕事のできる大人の女性という感じ。私がかっこいい憧れている人でもある。

「それ、って何のことです？」

意味がわからず私は首を傾げた。

「だから、すれ違いざまに社内の人を捕まえて、夏生まれだとか、生年月日に二の数字が付くかどうかって怖い顔で迫ることよ」

呆れたような顔で青木さんが言った。

マダム・オルテンシアの占いを聞いてから二週間、私は社内ですぐの甲にホクロのある男性を見つけては、運命の人の条件が当てはまるかを聞いていたのだ。

「社内ですぐになってるのよ。早瀬ちゃんは実は魔女で、何かの儀式の生贄を探してるんじゃないかって」

「ち、ちがいますよ！ そんなんじゃないありませんっ！ 何でそんな不気味な噂になってるんですか!？」

それって私、かなりヤバイ人みたいじゃない！

焦って否定すると、青木さんは我慢できないといった様子で大笑いした。

「だってさ、早瀬ちゃんのデスクの上に水晶玉置いてあるでしょ？ たまに一人で水晶玉に話しかけてるし、その頃から変な行動が目立つしさ」

「そ、それは——」

確かに、肌身離さずを意識して、会社にいる時はデスクに金色の台座まで用意して飾っていた。その方が効き目があると思ったから。

まさかその水晶玉のせいで、魔女扱いされていたなんて！

「あのっ、とにかく本当に違いますからね！」

そう何度も言うけれど、青木さんは笑ってばかりで取り合ってくれない。ううっ。社内ではあまり聞かない方がいいのかもしれない。

「まあ、それよりも、企画書はもう出したの？ 早瀬ちゃん、去年の今ごろは死にそうになってたでしょ？ 今年はもう終わったんだ？」

ひとしきり笑って満足したのか、青木さんは目元を擦りながら話題を変えた。私はきよんとんとして首を傾げる。

「え、企画書……ですか？」

「新商品の企画書よ。締め切り明日でしょ？ やだ、もしかして忘れてたの？」

「新商品……企画書………締め切りは明日？ はっど気付き、壁のカレンダーを掴みかかる勢いで確認する。

今日は第三木曜日……明日は金曜日！

「あ、ああー!!」

私は完全に企画コンテストのことを忘れていたのだった。

この会社では、入社から五年以内の社員は全員、毎年行われる『新商品企画コンテスト』への参加が義務付けられていた。

入社三年目の私ももちろん強制参加。そして、毎回苦戦している。

「ど、どうしよう……」

「やっぱり忘れてたんだ？ まあ、明日の朝一に社長が確認するんだから今日中に出せば大丈夫よ。終業時間まであと三十分あるんだし」

私は今年で最後なのよ、と嬉しそうに話す青木さんは入社五年目だ。発送処理の終わった納品書の控えを手渡ししながら、そんな彼女を恨みがましく見つめる。

「さ、倉庫の鍵しめちゃうわよ。ここに残る？ 残らない？」

「残りません！ 戻ります！」

私は急いでデスクの上のファイルを持ち、青木さんを小走りで追いかけた。

早く戻って新商品を考えなければ――

「そうだ、知ってる？ この倉庫って深夜零時すぎると出るんだって！ この前、岩崎課長がさ、倉庫の奥でシクシク泣く女性の声を……」

青木さんの話に適当に相槌を打ちながら、私はがつくりとうなだれる。どうがんばったってあと三十分で新商品を考えるなんて無理だ。でも企画書が完成するまでは帰れない。なんでもっと早く思い出さなかったんだろう……自分の間抜けさのため息を吐いた。

「あーこんなじゃ、だめだー」

ノートを破り、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に投げた。けれど、そのゴミは見事に外れて床にぽとりと落ちる。

「ああ、もうっ」

取りに行くのも面倒で、私は頭を抱えてデスクに突っ伏した。

セミロングの邪魔な髪を束ねていたクリップを外すと少しだけ頭が軽くなる。それでも、思い付かないものは思い付かない。

「このままじゃ、帰れない……」

腕時計を見ると時刻は午後八時半。商品管理部のフロアにはすでに誰もいない。

真っ白なノートを見つめながら、私は青ざめた。

「何も思い付かない……どうしよう、どうしよう……今日提出しないと間に合わないのに……」

焦れば焦るほど考える能力が消えていく気がする。缶コーヒーに手を伸ばしたけれど、中身は空っぽだった。しかもこれで三本目。

空腹の中コーヒーを飲むのもキツくなってきた私は、デスクの引き出しを開けて隠し持っていたチョコレートを一粒、口に放り込んだ。少しビターでほんのり甘いチョコレートが口の中でゆっくりと溶けていく。

ふと窓に視線を移すと、ちらほらと白い物が降っているのが見えた。

「う、嘘でしょ、雪降ってる！」

急いで窓に駆け寄り額を付けると、ひんやりとしたガラス窓の向こう側は、いつもの見慣れた景色ではなかった。街路樹や道路は、すでに真っ白な雪化粧が施されている。

私は目をつむり、履いてきた靴を思い返す。

最悪……今日はスカートに合わせて新しく買ったパンプスで来たんだっけ。

この辺は雪が降ったとしても、めったには積もらないけれど。

「絶対、帰るまでに五回は転ぶ……新品の靴なのに……」

そこでさらに、置き傘はこの前の雨の日に同期の友人に貸したまま返ってきていないことを思い出した。

コンビニまで、新品の靴で走って傘を買う自分を想像すると、背筋に悪寒おかんが走った。

「……天気予報の嘘つき！」

けれど、雨が降ろうが雪が降ろうが、私は企画書を提出しなければ帰れない。いつそのことこのまま社内泊まれば、雪の中を転びながら帰ることはせずに済みそうだけど。

私はぶんぶん頭を振ってその考えを追い払った。

「こんな寒さの中会社に泊まったら凍死する……」

膝かけに使っていたストールを身体に巻き付け席に戻る。

残業届を事前に出していなかったため、社内のエアコンは八時に自動で切れていた。じわじわとフロアが寒くなってきた。早く企画書を提出して帰らないと、本当に凍え死ぬかもしれない。

「今日に限って雪が降るなんて、どうしてこう運が悪いんだろう。運命の男性も、全然見つからない……」

運命の相手の条件を聞いた時、そこまで条件がわかっているなら見つかるのも簡単だと思っていた。実際、この二週間で右手の甲にホクロがある人を社内で見つけた。

しかし、未だにすべての条件を満たす運命の相手は見つけられていない。

「水晶玉さん、私の運命の人を探すの、手伝ってくれないの？」

無色透明の水晶玉を見つめながら、うつすらと映る自分と目を合わせた。

「ねえ、私の運命の人は一体どこにいるの？ いじわるしないで教えてよ」

……水晶玉は何も答えてはくれない。

でも、その代わり――

「あ、閃ひらめいた！」

丸い水晶玉、雪……雪だるま！

さっそくノートに雪だるまの絵を書いてみる。絵心のない私の書いた雪だるまは、どこを向いているかわからない目をしていて。けれど、絵心のなさを文章でカバーすれば企画書としてはギリギリ通るだろう。

「キャップの部分に雪だるまのキャラクター。カラーペン、ボールペン……シャープペンシルにしてもかわいいかも。人型なら赤ずきんちゃんとか、マトリョーシカっぽく……うん、猫だるま、ウサギだるま……動物でもいいよね……」

むくむくと色々な案が思い浮かび、どんどんペンが走っていく。

「ええと、対象年齢は、女子中高生くらいかな？」

かわいいものが大好きで、集めて自慢したくなる年頃を対象年齢に設定し、部署名と名前を書き記す。

「やった。企画書ができた！ 帰れるっ」

水晶玉、ありがとう！

ちゅっとお礼のキスをしてから水晶玉をバッグにしまい、更衣室に駆け込んで着替えた。

鼻歌を歌いながら廊下の途中にあるポストに企画書を提出し、エレベーターのボタンを押す。

そうだ、帰りにケーキを買って帰ろう！ この時間なら駅前のケーキ屋でタイムセールをしているはず。

暗い廊下に一筋の光が差し込み、エレベーターの扉が開く。

「モンブランと、チョコケーキ！ あとシュークリームも食べちゃおう」

嬉しさを隠し切れず二回転しながら乗り込み、一階のボタンを押そうと手を伸ばすと、操作パネルの前に先客がいた。

途端、身体に緊張が走る。

「わっ、す、すみません。お疲れ様です……」

なるべく顔を見せないようにしようと思いついた。でも、たぶんきつと、もう遅いけれど……

「お疲れ様」

何の感情もない声で返された。

先客がこの人ではなく他の人だったら、誰もいないと思いつき、くるくる回った自分を笑って誤魔化すことができたかもしれない。

でも現実はそのとはいかない。なんてつたつて、先客は営業二課の島崎課長だったのだから。

見た目からして怖い黒髪オールバックに、一寸の乱れも見られないダーク系のスーツとネクタイ。何が入っているのかわからない重そうな鞆はびかびかの黒革で、反対側の腕にはこれまた漆黒のコートをかけている。

胸ポケットからピストルが出てきてもきつと驚かない。闇の暗殺者だつて言われれば、なるほど、と妙に納得してしまう迫力があるのだ。

銀縁メガネの奥で光る冷たい瞳は、何を考えているのかまったくわからない。そればかりか、たつたひと睨みで私を凍りつかせる。

とにかくまどつているオーラが半端なく怖い人。

今も、背中にモノサシでも入れてるんじゃないかつてくらいびしょとして直立不動。私がちよつとでも反対側の足に重心を変えただけで、エレベーターを揺らすなど睨まれそうだ。

部署は違うし接点もないため、片手で数えるくらいしか話したことがないけれど、見た目や雰囲気私の苦手なタイプ——つまり、不機嫌でいつも怒つていそうな人という印象。

だって、眉間に皺を寄せて書類を睨んでいるか、腕を組んで仁王立ちしながら睨んでいるかのどちらかしか見たことがなかったから。

さつき一瞬だけ目が合った時も、眉間に深い皺を刻んでいたのを私は見逃さなかった。

見た目通り、仕事に関してはものすごく厳しいと噂で聞いていた。三十代前半で、数年前に課長になってからは特に厳しくなったらしい。それなのに、よくわからない人気がある。

青木さんなんかは、すれ違つると「イケメンご馳走様」なんて呟きながら目で追っていたけれど、

こんな怖そうな人のどこがいいのか、私にはさっぱりわからなかった。

身長が高く威圧感があり、並んで立つと先生に叱られている生徒のような気分させられる。ふと昔の嫌な記憶が通り、私はぎゅっと目をつむった。

こんな密室で一緒にいると、眩暈がして吐きそうになる。

お互い黙り込んでいるせいか、エレベーター内の空気が重い。けれどこれといって振る話題もない。いや、振りたくもない。

早く一階に着いてくださいと心の中で何度も神様に祈り、数十分かと思われるほど長く感じた数十秒後、エレベーターはやっと一階に到着した。

緊張しすぎて頭が痛くなっていた。携帯電話を握る指先の感覚もない。ずっと止めていた息をふーっと吐き、ちらりと島崎課長の足元を見た。

けれど、扉が開いたのに島崎課長はなぜか降りようとしなかった。それどころか刺すような視線を感じる。一歩後ろに立つ私のことをじっと見ている気がしてならない。

今すぐにも走って逃げたかったけれど、入社三年目の下っ端が課長より先に降りるわけにもいかず、へびに睨まれたカエルのように、課長が降りるのをじっと待った。

「降りないのか？」

「え？」

驚いて、ついへび……ではなく島崎課長と目を合わせてしまった。

一度合うと、もう視線を外せなくなる。

「は、はい、降ります……けど、お先に、どうぞ……」

なんとか声を絞り出したけれど、しどろもどろになってしまった。

ああ、やっぱだめ……

威圧感に耐え切れず、少したけ視線を外し、島崎課長のネクタイを凝視する。

すると静かなエレベーターに、はあ、とため息が響く。

もちろん私ではない。何か島崎課長の機嫌を損ねることもしたのだろうか。寒いのに、汗が背中を流れた。

「ボタンを押してるのは俺だから、君が先に降りなさい。でないと、君が扉に挟まれることになる」

「え……あつ」

よく見ると操作パネルの前に立っている島崎課長が開くボタンを押しながら、私が降りるのを待っていた。

相変わらず無表情で何を考えているのかわからなかったけれど、いつまでも降りない私にイライラしているのだろう。

「……あ、えっと、すみませんっ」

これ以上怒らせてはいけない。そう思って急いでエレベーターを降りると、たるんでいたカーペットに足を取られた。

「きゃあっ」

一階はすでに電気が落とされていて、足元がよく見えなかったのだ。焦りもあってか、宙に浮いたままの片足が前に出ない。床に叩きつけられる覚悟を決めて目をきゅつとつむったけれど。

「そこまで慌てなくてもいい」
痛みが来る前に耳元で声が聞こえた。背後から手を引かれ、気付いた時には島崎課長の腕の中にいた。

「暗いから気を付けて」
耳元で囁かれ、驚いて振り返ると間近で目が合う。
爽やかなミントの香りが感じられるほど、近い。

「ご、ごめんなさい……」
それしか言えなかった。

島崎課長は無言で私を離すとエレベーターから降りた。
扉が閉まり、辺りは一気に暗くなる。

心臓がドキドキとうるさいのは、驚いたからなのか怖いからなのかわからない。
呆然と立ち尽くしていると、島崎課長がしゃがんで何かを拾っていた。

「落としたぞ」
それは、さっきまで私が持っていた携帯電話だった。落ちた拍子に画面の明かりが点灯し、猫のイラストの待ち受け画像が表示されている。

「あ、すみませ——ひいっ」

携帯電話の明かりを下から受けた島崎課長の顔が、暗闇の中でぼうつと浮き上がった。

「な、生首!？」

びくつと震えて一步後ずさる。携帯電話の明かりが消えると、辺りは再び暗くなった。

よくよく見ると首の下にはちゃんと身体が付いている。濃い色のスーツが闇に同化していて、なかなか見分けがつかなかったけれど。

島崎課長は眉間に皺を深く刻むと、私に近付き携帯電話を握らせた。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

課長の手は温かかった。私の指先は緊張して冷たくなっていたらしく、触れたところが熱くてその温度差にまた驚く。

そうか、手が温かい人は心が冷たいって言うしなあ。なんて、放心状態でそんなことを考えていたら、いつの間にかビルの入口に辿り着いていた。

今日は色々なことがありすぎて頭が追いつかない。早く帰りたい。

「うわあ、雪降ってたんだっけ」

思わず呻いて空を見つめる。雪は窓から見た時よりもひどくなっていた。

凍えるのを覚悟して歩いて帰るか、転ぶのを覚悟して走って帰るか——そんなことを考えながらしばらく立ち尽くす。

「傘がないのか？」

「えっ？」

いつの間にか私の横に島崎課長が立っていた。

気配がまったく感じられなかったので、てっきり裏口から出たのかと思っていた。

「傘を忘れたのか？」

馬鹿な子を相手にしているかのように、島崎課長は言い方を変えただけの同じ質問をする。

「あ、あの……いえ、大丈夫です」

質問に対しての回答になっていないけれど、ないと行って、万が一駅までご一緒することになったら、私はきつと緊張と恐怖で死んでしまう。

焦りながら言うと、島崎課長は鞆の中から折り畳み傘を取り出した。

「傘がないのだろうか？ これを使っている」

「で、でも、そしたら島崎課長が……」

島崎課長は一瞬驚いた顔をしたあと、再び眉間に深い皺を刻んだ。

「俺は今日、車だから問題ない——足元に気を付けて」

有無を言わず傘を手渡され、受け取ってしまった私にそう言い残すと、島崎課長は大腿で駐車場に行ってしまった。

「あ、あのっ……ああ、ありがとうございます！」

呆気にとられてしばらく硬直していた私は、お礼を言っていなかったことに気付いて大声で叫ん

だ。聞こえたかどうかはわからない。数秒後に車のドアが閉まる音が聞こえた。

「もしかして……」

傘を貸してもらえたのは幸運？

「でも、明日返さなきゃいけないんだよね……ってことは島崎課長に会いに行かなきゃいけないんだ」

ちよつと……いや、かなり嫌だ。

あの眉間の皺、怒ったような口調、ただ話しているだけなのに怒られている気分させるほどの威圧感。

「はあ……」

やっぱり、イイコトなんて何もない。

「私の運命の人はどこにいるんだろう……」

紺色の折り畳み傘を差してとぼとぼと歩き出す。

帰りに駅ビル内のケーキ屋さんで半額になったケーキを買うことはできたけれど、そのあと結局、二回転んでしまい、家に着いた頃には箱の中のケーキは見るも無残な姿になっていた。

しかも——

「わああ……ど、どうしよう。殺される……」

転んだ拍子に傘の骨を折って壊してしまったのだ。よりによって島崎課長に借りた高そうな傘を。

「新しいの買って返さなきゃ……同じのあるかなあ……」

倉庫と本社を繋ぐ渡り廊下からは、敷地内に植えてある桜の木が見える。この桜が咲くと、各部署でお花見をするのが毎年の恒例だった。

商品管理部は夜ではなくお昼休みに行っていた。業務中なので酒は出ないもの、お寿司やチキン、サンドウィッチなどをケータリングして、しかもお土産に三時のおやつもついてくる。

桜の蕾は日に日に膨らみ始めていた。あと数週間もすれば花びらが舞い始める。私はこの時期になると、桜はいつ咲くのだろうか、お花見はいつするのかとそわそわしていた。

「前方確認、人の気配なし、と」

でも今、私はそれどころではない。

背中を壁側に向け、カニ歩きで渡り廊下を進む。目指すは本社の三階、商品管理部のフロアだ。

「早瀬さん、どうかしたの？」

「あ、いえ、あはは……お疲れ様ですー」

誰かとすれ違うたびに不思議そうな顔をされたけれど、私は絶対に、誰にも背中を見られるわけにはいかなかった。

「エレベーターの方が早いけど、誰かと乗り合わせるかもしれないよね……」

そう思っただけは階段を選んだ。前からも後ろからも人が来ないことを確認すると、私は一気に階段を駆け上がり、折り返し地点である踊り場の壁に背中を預けた。

「まさか、こんなことになるなんて……」

自分の不運を嘆かずにはいられない。香川さんに言われた時は、この世から消えてなくなりたいと思ったくらいだ。

「とりあえず、一刻も早くコレをなんとかしないと」

さながら忍者のごとく、耳を澄ませて周囲を探り、人の来ないタイミングを見計らう。しかし、あとちょっとで商品管理部のフロア、という所で思わぬアクシデントに見舞われるのが私なのだ。

「何をしている？」

聞き覚えのある声に、冷や汗が流れる。ゆっくりと顔を上げた視線の先にはやはり――

「げえっ！」

そこにいたのは島崎課長だった。

「どうかしたのか？」

「あ、あの……えっと」

身体が勝手に後ずさり、階段を一段踏み外してしまう。とっさに片腕を伸ばして手すりに掴まり、下まで落ちることは免れた。けれどピンチなことには変わりはない。

「あの、お、お疲れ様です……」

こんなところで、島崎課長に会うなんて！

「どうやって逃げようかと頭をフル回転させるけれど何も思いつかない。」

「どうした？ 気分でも悪いのか？」

島崎課長は駆け足で下りてくると、硬直している私の前に立った。

「いえ、あの——」

その視線が、私の顔から肩を辿り腰辺りに向けられる。それから眉をひそめ、何か難しいことを考えているように口を引き結んだ。

「ばれたのだろうと思った。万事休す……視線を逸らして俯ぎ、スカートをぎゅっと掴む。」

「早瀬君——」

「な、何も隠してません！」

パニックに陥ってしまった私は、島崎課長の言葉を途中で遮って叫んだ。はっと気付き、失礼な態度を詫びようとして顔を上げると、驚いている島崎課長と目が合う。

「……何かを、隠しているのか？」

島崎課長は目を細め、ほんの少しだけ首を傾げた。

「え？」

あれ、もしかして気付かれてなかったの？ 私、墓穴を掘った？

「あああ、あの、あのっ！」

今さら気付いたって遅い。私が何かを隠していると確信したらしい島崎課長は眉間に深い皺を刻んだ。私から天井の明かりを遮るように立ち、腕を組む。

「早瀬君」

「な、なんで、しょうか……」

「今、自分で何も隠していないと言ったな？ ならば手を出して見せてみなさい」

「いや……その、それが、できないわけがありません……」

この手を離したら、私は一生分以上の恥をかくことになる。だから誰に何を言われても手を離すわけにはいかない。

「どうしてだ？」

かつ、と靴が鳴り、島崎課長が私との距離を詰める。ただでさえ暗い階段なのに、完全に光が遮られてしまった。

「正直に話さない。ここには俺と君しかいない。誰も見ていない」

島崎課長は声を落とし、私だけに聞こえるように耳元で囁いた。

「だ、だから、私は……」

島崎課長の顔を見上げる。この目は見覚えがあった。私がまだ中学生だった頃のこと。ことあるごとに私を疑いの眼差しで見ると同じ。苦しい記憶が脳裏を掠め、私はごくりと唾を呑み込む。きつと島崎課長も、私が何かを盗んで隠していると思っただけに違いない。

いつも、そう……何も悪いことなんてしてないのに、どうして私だけがこんな目に遭わなきゃいけないの？

目頭が熱くなり、唇を噛んでぐっと涙を堪えていると——

「おーい、早瀬ちゃんいるのー？」

階段の上から青木さんの声が聞こえた。

「スカート大丈夫？ さっき香川さんから内線があつて、スカートが破れてパンツ丸見えの早瀬ちゃんが戻ったから面倒見てって言われ——わ、島崎課長!？」

針と糸を持った青木さんが、私たちの様子に気付き立ち止まった。

「二人とも、どうしたんですか？」

私の隠しごとは、いとも簡単に青木さんによってばらされた。

何かを盗んだと疑われるのは嫌だったけれど、スカートが破れているのを知られるのはもっと嫌だった。私が真っ赤になって俯うつむいていると、目の前で大きなため息ため息が零こぼれた。

「それを早く言いなさい」

小声で囁ささやくと、島崎課長はスーツの上着を脱ぎ、私に差し出した。

「え？ あの……」

「これで破れたところを隠せば、少なくとも階段から落ちる心配はないだろう」

驚いて、片手を出してしまった私に上着が押し付けられる。受け取ったのを確認すると、島崎課長は踵かかとを返して階段を下りて行ってしまった。

「すまなかった……」

去り際さゆに、そんな言葉を残して。

私は呆然とその後ろ姿を目で追うことしかできなかった。

「早瀬ちゃん？」

青木さんに声をかけられ、はっと我に返る。

「どうしたの？ 声が聞こえたから迎えに来ただけど……大丈夫？」

「だ、大丈夫です。でも、どうしよう。上着、貸してもらっちゃいました」

「良かったじゃないの。そのまま更衣室に行きましょう。まずはそのスカートをどうにかしなくちゃ」

青木さんに促うながされ、私は島崎課長の上着を腰に巻いて階段を上がった。

ああ、どうしよう……スカートが破れていたことを、あの島崎課長に知られてしまった。

恥ずかしくない。しかも盗難どなんを疑われたあげく、本当のことを知られて呆だまれられた。

「もう、嫌……」

ぼつりと呟つぶやくと、青木さんが楽しそうな顔で振り返った。

「倉庫で作業して制服のスカートを引っかけるなんて、早瀬ちゃんくらいなものね」

「はい……」

私があつくりと肩を落とした。

「しかも島崎課長にばれちゃうなんて、恥ずかしい思いしたわねえ」

それを楽しそうに話す青木さんに思わず不満をぶつける。

「青木さん、ひどいです。青木さんがばらしちゃったんじゃないですか!」

じとつと睨にらむと、青木さんはにやにやと嬉しそうに笑う。

「裁縫の苦手な早瀬ちゃんの代わりにスカート縫ってあげるのよ？ これくらいの意地悪させてよ」

「ううっ……」

今日も、イイコトなんて何も無い。

それを裏付けるかのように、最悪な出来事はそれから数時間後のランチタイムに起こった。とつくに忘れていた新商品企画コンテスト。その結果が掲示板に張り出されていたのだ。

「ちよつと見て見て！ 早瀬ちゃんの名前が載ってるよ！」

「え？」

掲示板の前を通り過ぎようとした私の腕を掴み、青木さんが立ち止まる。

大抵は営業部や企画部所属の人の案が採用されていて、私には関係ないといつもスルーしていたのだけ——

「う、嘘……」

そこには、私の名前が大きく書いてあったのだ。

「わお、すごいじゃないの！」

「え、本当に私？」

人をかき分け、掲示板に近付き、まじまじと見る。

商品管理部、早瀬香織……名前の横には新商品案の簡単な説明文と、優秀賞・商品化決定と書いてある。確かに私の名前と、私が考えたものだった。

「ど、どうして……」

これ进行思いついた時は我ながら名案だと思った。売っていたらきつと買っちゃうだろうな、なんて自己満足な思いもあった。

「もしかして……」

「ただ、本当に私の作品が選ばれるなんて——」

「そうだ、あの時は水晶玉に聞いたのだ。そしてすぐにこれを思い付いた。」

「やっぱりこれって幸運を招き寄せる水晶玉のおかげ？」

「早瀬ちゃん、食堂混むから行くよ？」

「あ、はい。すぐ追いかけますので先に行ってください」

本当に、私が選ばれたんだ……

じわじわと実感が広がり、何度も何度も掲示板の名前を読み返したあと、いそいそとポケットから携帯電話を取り出して証拠の写メを撮った。家に帰ったら家族に自慢しよう。

「——で、今度は誰の企画を盗んだわけ？」

嬉しさに浸っていると、そんな声が私の耳に届いた。

振り向くと、そこには私の同期、小林千尋が立っていた。

営業部営業二課に所属している小林さんは、女性社員共通の制服ではなく自前のスーツ姿。営業部は外回りが多いために制服は着用せず、それをいつも自慢げにしていた。そして、入社当時から

私の天敵でもある人物だ。

今も腰に手を当てる高圧的に私を睨みつけている。

「べ、別に盗んでなんか……人聞きの悪いこと言わないでよ」

小林さんが『盗んだ』と言ったせいで、周囲がざわついた気がした。

「私、ちゃんと自分で考えたよ！」

「ふん、そうやってムキになるのが怪しいのよね。前科だってあるじゃない。一昨年おととしのコンテストで私の企画の真似したくせに」

「し、してない！ あれは本当に偶然で——」

「でも偶然にしては似すぎじゃない？」

「わ、私は本当に……」

他の人も聞いているというのに、小林さんはどうしてこんなところで言うの？

「じゃあ、私が早瀬さんの案を盗んだって言うの？ 私の方が先に提出したの？ 疑わしいのは

早瀬さんの方でしょ」

そう言われてしまえば何も言えなくなる。だって証拠は何もないのだから。

「で、でも……私は……」

気が強く、物事を躊躇なく言える小林さんとは入社当時から馬が合わなかった。彼女の方も、すぐに黙ってしまう私のことを嫌っているふしがある。いつからか、何かにつけて私に文句や嫌味を言ってくるようになっていた。

「ほら、何も言えないじゃない」

一人っ子のせいとか口喧嘩げんかの経験がない私は、こうしていつも言い負かされてしまうのだ。

内容が似ていたことは提出したあと、同期との飲み会でお互いの企画を教え合って一度話題になっただけ。企画書の内容さえ見せていない。それなのに、小林さんは真似をされたとずっと言ってくる。

「私は……本当に……」

はっきり否定するべきなのに、うまく言葉が出てこない。

これじゃ肯定するのと何も変わらないのに、何て言えばいいのかわからない。じわじわと目頭が熱くなる。

「みんな、ちゃんと真面目に考えて提出してるのに、ほんと、ずるいわよね！」

俯くと、勝ち誇ったような小林さんの声が一段と大きくなった。

「だいたい、早瀬さんは——」

「小林君、こんな所で何をしている？」

この声は——

「あ、島崎課長……」

緊張したように小林さんがその名を口に出した。

「長谷川はもう外出したぞ。現地集合と聞いたが、二時からの打ち合わせはいいのか？」

「すみません、今行きます」

焦ったように小林さんは急ぎ足で去り、同時に短く貴重なランチタイムを思い出した周囲も食堂へ移動していく。

あらぬ疑いをかけられた、みじめな私をひとり残して。耳が熱くなり、恥ずかしさで目に涙が浮かぶ。ぐつと下唇を噛んで瞬きを繰り返し、どうにか堪えた。滲んで見える足元には、まだ島崎課長の靴がある。

本当にタイミングが悪すぎる。スカートが破れた時といい、今といい、どうしてこんな時にばかり現れるの……

靴の向きから、島崎課長がずっと私を見下ろしていることには気付いていた。頭のとっぺんにあつむじに視線が突き刺さっている。

だから顔が上げられない。逃げたいのに逃げ出せない。

どうしよう。どうするべき？ 島崎課長がいなくなるのを待ってればいい？ それとも私が先にこの場から消えた方がいいの？ 色々考えすぎてわけがわからなくなった頃、島崎課長が口を開いた。

「この企画は毎年あるんだ、必ず数人は似たような案を出す。だから……君も気にするな」

「はい……」

島崎課長は、やっぱり私と小林さんのやりとりを聞いていたのだ。何も言い返せないでいた私のことも見ていたのだろう。

「……では、失礼しますっ」

居たたまれなくなった私は、顔を見られないようにぐつと頭を下げ、その場から小走りで逃げ出した。そして、すでに食事を始めていた青木さんの隣に滑り込む。

私の企画商品が選ばれたりしなければ、あんなふう到大勢の前で小林さんに盗作を疑われることもなかった……どこまで運が悪いのだと沈んでいると、青木さんが嬉しそうに振り返った。

「よかったねー早瀬ちゃん。あれ、残業して何時間も考えたやつでしょ？」

「え？ あ、はい……」

「がんばったらがんばった分だけ報われるんだよ。いいこいいこ」

そう言いながら、私の頭を撫でてくれる。

がんばった分だけ報われる……その言葉がじわりと胸の奥に染みこんでいく。本当に、そうなのだろうか。

あの企画は、私が何時間もかけて考えたものだ。盗作なんかしていない。そのことをわかってくれる人は、ちゃんとわかってくれている。そう思ったら止まったはずの涙が目に浮かんだ。

「やだ、泣いてんの？ そんなに嬉しかったのかーよしよし、良かったねえ……あ、島崎課長発見！ 今日は二回も見ちゃった、やーんラッキー！」

そんな青木さんの声でピタリと涙が止まる。

「なんかここ最近、島崎課長をよく見かけるの。偶然かしら、それとも運命だったりして！」

「……うんめい？」

冗談まじりに話す青木さんの言葉が妙に引っかかった。

簡単に見つかると思つた私の運命の人は、今もまだ見つかつていない。そつと振り返り、島崎課長の後ろ姿を盗み見る。

最近よく島崎課長に会うのは確かだけど……まさかね……？

それから一週間後、新年度からの人事異動が発表された。ちなみに私は異動願ひなんて出してない。それなのに——

「そ、そんな……これはどういうことですかっ!？」

「いやね、この前賞を取つた早瀬君の企画商品、営業部長の飯田さんがえらく気に入つてね——」
商品管理部の部長から手渡された辞令を見て、私は気を失いそうになっていた。

「今の営業部には若い女性の意見も必要だとかで、ぜひにと言われたんだ。こちらとしては、がんばつてくれている早瀬君を取られると困るんだがね」

そう言いながらも笑っている部長は、全然困っていないように見える。

「ま、四月からがんばつてくれたまえ。君ならできると信じているよ」

肩を叩かれ、話は終わりと終わらなばかりに部長は香川さん呼び付け、仕事の話始めた。

手渡された辞令を見つめながら、私はふらふらと自分の席に戻り、椅子に崩れ落ちた。

「早瀬ちゃん、どうしたの？」

隣の席の青木さんが私の手元を覗く。

「あら、人事異動？ 営業部の営業二課……島崎課長のところじゃないの！」

そう、よりもよつて——

「花形営業部！ うっそ、羨ましいわー」

「じゃあ、代わつてくださいよっ」

こんなやつてない！ やつぱり私、どうしようもならないほど不運の持ち主らしい。

これからずつと、島崎課長に睨まれて、小林さんに嫌味を言われながら仕事をするの？

意地悪な小林さんのことだ、私が座ろうとした椅子を引いて、転ばそうとするかもしれない。私は気付かず床に尻餅をついて笑われたあげく、座ろうとしたキャスター付の椅子は、その拍子にコロコロとどこかに行つて、偶然島崎課長にぶつかつたりするかもしれない。さらに課長がこけそうになつて飯田部長の頭部を掴んで、カツラがスポーンと飛んじやつたりなんかして。

いや、あの髪の毛がカツラだつていうのはただの噂だけど……そつか、その噂が私の手によつて真実になるんだ。

怒り狂つた部長に怒られて、島崎課長には睨まれて、小林さんにザマミロつて笑われて……
そのうち会社にいられなくなつて辞表を提出するのだろう。

それが、私が想像できうる最悪の事態。

……うわあ。

なくはない。なくはないっ！

「このままじゃ、仕事がなくなるー!」

このままじゃいけない！ 早く運命の男性を見つけないと、とんでもないことになってしまう！

「それだけは嫌！ 絶対に！」

私の幸ある未来のために、今がんばらないでいつがんばるの!?
そう思った私は、立ち上がり決意を込めて拳を振り上げた。

「やだ、大丈夫……?」

驚いた顔をした青木さんと目が合った。

それからあつという間に三月が終わり、四月一日、私は新品のスーツに身を包み、営業部のフロアに立っていた。

ずっと制服を貸与されていたから、営業部への異動は色々と準備が大変だった。外回り業務が主な営業部では、制服ではなく自前のスーツが必要となるからだ。

学生時代のリクルートスーツではどうにもならず、この数週間でかなり散財するはめになった。私服で通勤していた時とは一変、スーツは堅苦しくてまだ慣れない。

「商品管理部から異動してきました、早瀬です。よろしくお願いします……」

「そうやって並ぶと新入社員と一緒ね……」

小林さんの嫌味に、営業部の飯田部長を含め数人が小さな笑いを零す。

幸か不幸か——いや不幸なことに、他部署から移動してきたのは私だけで、横に並ぶ他の三人は新入社員。自己紹介と称して部長に紹介されている途中なのだ。

「ここにいる早瀬君は、先月の新商品企画コンテストで見事に優勝したんだ。商品管理部にいたん

だが、それが縁で私が引き抜いてきた——」

自慢げに話し始める飯田部長の言葉に冷や汗が止まらない。

「みんなも彼女を見習って、消費者の立場で新商品を提案してくれ。そういうわけで、今後の活躍を大いに期待してるよ、早瀬君！」

「は、はいっ」

「引き抜きてすごいですね、早瀬センパイ！」

「あはは……そんなこと、全然ないよー」

新入社員からの羨望の眼差しがちくちく痛い。

今日までの間、私は死に物狂いで運命の男性を探した。にもかかわらず、それらしい人はひとりも見つからなかった。最悪な事態になるのも時間の問題かもしれない、ということだ。

ああ、もう、どうしよう……

私のために用意されたデスクの端に水晶玉を置き、はあ、とため息を吐いた。

島崎課長が率いる営業部の営業二課は、大手スーパーや、大型文房具店を相手に営業活動を行っている、それとは逆に一課は商店街などにある個人経営の文房具店を顧客として扱っていた。

初めての営業部でいきなり外回りをしろということはなく、まずは慣れるためにと見積書や請求書の作成——要するにデスクワークをしていた。

そこまでパソコンが得意ではない私は、作成手順を覚えるだけでも大変な作業だった。

しかも私の席は島崎課長の隣で、ふと視線を感じて顔を上げるとよく目が合う。そうなると、意識しすぎて緊張が高まり、小さなミスを繰り返してしまうのだ。

あのメガネの奥の目が怖い。何を考えているのかわからない無表情が私をいつも緊張させる。作成した見積書を渡す瞬間は生きた心地がしなかった。

「……早瀬君、また消費税が抜けているぞ。作り直しだ」

「え、あ……す、すみません」

やり直しを命じられた書類を震える手で受け取る。その時、島崎課長と目が合った。課長は何か言いたげに口を開き、少し間を置いてからため息を吐いた。

どうしてこんな使えない奴が部下になってしまったのか——きっとそう思っているのだろう。

……そんなの、私が聞きたいくらい。

思わぬ評価のせいで、私は楽しかった商品管理部から地獄の営業部に異動させられた。仕事ができるわけでもないのに、エリート揃いの営業部なんて、私には荷が重すぎるといふのに。

これ以上どんな不幸が待っているのか、考えるだけで恐ろしかった。

「はあ……」

肩を落としてデスクに戻りパソコンに向かう。とはいっても、課長の席からわずか数歩の距離だけだ。

外出してくれないかなあ……

課長が外出している時は、緊張しないので集中して仕事ができる。もちろんミスだって少ない。

出かける様子のない課長の気配を感じながら、私はパソコンの画面に映る見積書に消費税を入力した。

そんなこんなで数日後の週末、新入社員と私の歓迎会が行われた。

「さあ早瀬さん、もっと飲んで飲んで！」

「誰の歓迎会だと思ってるの？ ほらほら」

「あ、ありがとうございます……」

お酒はあまり強くないのに断りきれず、何度目かのビールがグラスに注がれる。

落ちついた商品管理部とはノリが違って盛り上がる中、私はだいぶ飲まされた。すさまじい酒豪らしい飯田部長の隣に座ってしまったため、一時間もするとかなり酔いが回っていた。

部長の武勇伝に相槌を打ちながら、早く帰りたいと思っていたら、いきなり周囲から歓声がかかる。

「島崎課長の登場です！ 遅いですよー課長！」

聞かえてきたその名前に、私は身体を丸め、隠れるように縮こまる。

どうか向こう側の席に座ってくださいように……。そう心から願った。

「島崎君、待ってたよ。さあさあこっちに来て。早瀬君、お酌してあげて」

「え、ええっ!？」

けれど、私の願いはその部長の一言で簡単に打ち砕かれた。

島崎課長は部長の前に座ると、空のグラスを手に持つ。

「お、お仕事お疲れ様でした」

私はテーブルに身を乗り出し、ビールの瓶を傾けた。手が震えて瓶とグラスが当たり、カチカチと音が鳴る。

零さないように注がなくては――

そんな思いが、あろうことか私の手を滑らせた。瓶が手から離れ、テーブルに落ちたのだ。

「すみません課長！」

急いでおしぼりでテーブルを拭くと、そのはずみでお通しの小鉢がひっくり返った。

「わあああっ」

私はもうパニック寸前だった。

「すみませんすみませんっ」

「早瀬君、落ち着きなさい。これくらいは問題ない」

冷静にテーブルの上を片付ける島崎課長は怒っているのか呆れているのか、それとも何も思っていないのかわからない。

「おしぼりを頂けますか？」

通りかかった店員を止めて、いつもの無表情で言う。

「ほんとうにすみません……」

やってしまった。またやってしまった。やってはいけないところで、私は――

「まあまあ、島崎君も大丈夫だって言ってることだし、ささ飲んで飲んで！」

「はい……」

部長に勧められるままに、私はビールを飲んだ。

飲んで忘れてしまいたかった。今の出来事も、これまでの失敗も。

「ふはっ」

「いい飲みっぷりだね、早瀬君」

「お、恐れ入ります部長っ」

空になったグラスに再びビールが注がれる。

――まともに記憶があったのはここまでだった。

「ちよっと、真っ直ぐ歩きなさいよ！　なんで私が、同期だからってあなたの面倒見なきやいな
いのよ……」

小林さんに腕を引かれ、私は店の外に連れ出されていた。

「外、涼しい」

「つたく、今タクシー呼んだから、来たらあとは自分でなんとかしてよね！」

イライラした口調で小林さんが文句を言っている。

「うん、ありがとー。小林さんっていいひと」

「はあ!？」

いつもは苦手な小林さんも、今はなんだか普通に話せるのが不思議。

小林さんは道路を眺みながら腕を組み、靴をコツコツと鳴らしている。その音が守唄のように聞こえてくる。私はふわふわと心地よい感覚に支配されて、目をむった。

「ちよっと！ こんなところで寝ないですよ！ やだ、寄りかからないで！ 重いわよっ」
「大丈夫か？」

耳元で声がしたと思ったら、背中がほんわかと温かくなる。その包まれるような安心感に、私はゆっくりと身体を預けた。

「あ、島崎課長……これが大丈夫に見えます？ ちよっと早瀬さん、自分で立ちなさいよ！」
「あとは代わるよ。タクシーは？」

「呼びましたけど……え、二次会には行かないんですか？」

「残ってる仕事を帰って片付けたいから、今回はパスさせてもらおうよ」

それから、家が同じ方向だからそのまま送っていく、とか聞こえた気がする。

しばらくすると、ガクンとした揺れと、首に感じる鈍い痛みに目を覚ます。

「あれ、島崎課長？」

気が付くとそこはタクシーの中で、隣には島崎課長がいた。お酒のせいか、それとも暗くて課長の顔がよく見えないからか、不思議と恐怖は感じなかった。

「起きたか。そろそろ起こそうと思ってた。家はこの辺りだと思ったんだが、住所は言えるか？」

「あ、はい……」

実家の住所を告げると、タクシーは大通りから住宅街へと入り、見覚えのある道を滑るように進んでいく。

私は隣の課長に視線を移した。

皺のないパリっとしたスーツを着こなした隙のない姿。爪が短く切り揃えられた手は、膝の上に置かれている。私は最近の習慣で、自然と島崎課長の手の甲に視線がいつてしまう。

その時、ちょうど外の光が車内を照らし、課長の手の甲がはつきり見えた。

あれ――

手を伸ばし、課長の腕を掴んで持ち上げる。

「どうした、早瀬君？」

外の明かりに照らして課長の手の甲を凝視した。

「これは……もしかしてホクロですか？」

「ああ、そうだが――」

「課長って誕生日いつですか？」

「誕生日？ 八月二十四日だが、それより手を――」

「八月……ってことは獅子座ですね！ 課長は超几帳面に見えます！ 血液型はA型ですよね？

絶対そう！」

マダム・オルテンシアに教えてもらった私の運命の人の条件、それは獅子座のA型で、生年月日に数字の二が付き、右手の甲にホクロがある。もしも課長がA型であれば条件はぴったり揃う。

「なんとか言ってみて下さい、課長！」

私の勢いに気圧されたのか、島崎課長は逃げるように上半身を反らした。その距離を詰めるように私は身を乗り出す。

ずっと探していた運命の人は、目の前にいるこの人かもしれない。

「た、確かにA型だが、俺に乗っかるな、車内なんだからおとなしくしてくれ——」

島崎課長にぐいと肩を押されて離される。

そのはずみで窓ガラスに後頭部をしたたかに打ったけれど、不思議と痛みは感じなかった。

「ふふ、ふふふっ」

やっと思つめた。私の運命の人！

「すまない、頭は大丈夫か？」

不気味な笑い声を上げる私に、島崎課長が焦つたように聞いてくる。

「島崎課長、私なんだか楽しくなってきました」

「……飲みすぎだぞ、早瀬君……」

飲みすぎ？ そんなことは関係ない。

「だってやっと思つてたんです……これで安心して眠れそうです」

私は満ち足りた思いで再び目をつむつた——

ここは深い森の奥、ぼつかりと空いた広場には色とりどりの花が咲き乱れ、ひとりの女の子が

眠つたように横たわっていた。

集まった動物たちは、つぶらな瞳を濡らし、彼女が目覚めないことを嘆いている。

そこに聞こえてきたのは馬の蹄の音。

「美しい女性だ」

それは聞いたことのある声だった。

「ぜひ、我が妻に迎えたい」

彼が口づけをすると、瞬く間に彼女は——ううん、私は息を吹き返す。

逆光でその人の顔は見えなかった。けれど、差し出された右手の甲にはホクロがあった。

「わたしはA型で、誕生日は八月二十四日です」

「まあ、ではあなたが私の探していた運命の人なのね！」

「恭しく私の手を取ったその人は——え、島崎課長!？」

「わああああ！」

あまりの衝撃で私は飛び起きた。

「ゆ、夢……?」

見覚えのある壁のポスターに水色のカーテン、ここが自室なのだ気付いてほっと息を吐く。同時にバランスを崩してベッドから滑り落ちた。

「い、痛い……」

土曜の朝、目覚め方としては最悪だった。